実践提案２学年　部会記録　　記録者：六つ川西小　佐藤

●提案者から
・自然材が多いが、生き物と関わることが出来た児童は半数くらいだった。
・ウエビングを基に、学習材を練っていった。
・道徳や国語にもつなげていくことで、興味をもって続けることが出来ていた。
・国語においては、『表現』を重視している。
・ほぼ全員の児童が生き物に興味をもち、１年間通して実践を進めていく。
・川のなかや田んぼと同じような環境になるように、水槽内を作っていった。

●部員から
・子どもの思いを大事にし、読み取ることが出来ている。
・ウエビングを基にすることで、子どもの思いに沿いながらも、教師が思う道筋に持っていくことが出来ていた。
・自分ごとになって取り組むことが出来ている。
・生き物への愛着を持っている反面、『生き物にとって』の『命の大事さ』が軽くなってしまうときがある。（大人から見ると扱いがおもちゃのように見えてしまう）
・生き物に心を寄せていくだけでなく、子どもたち自身が、悩んだり壁があったりするからこそ、成長することが出来ている。

●講師より
・生活科とは、子どもの生活に還元されるのが本来あるべき姿である。
・恵まれた環境をフル活用している。
・教師が子どもの関わりが自然で、子どもの考えや思いの流れに教師が描く流れを添わすことが出来ている
・他教科へのつながりが自然であり、生活科での材を素材にして、国語や他教科への連携へ進めることが出来ている。よく、生活科で図鑑を作るような学級もあるが、そこにはめる必要性はない。
・生活を学級経営にしていくと、子どもたちの力を発揮したくなる。
・話し合いを行うときは、問題が起こったと気にその都度話し合うのもよいが、
　『共通体験をする　→　話し合いをする　→　価値づけをする』の基本パターンも必要
〇いきもの単元について〇
・いきもの単元では、生き物との関わりを楽しむ生活をすることで、子どもたちの生活の変化を狙う。
・命の重み
　→子どもにとっては、人と動植物の命は同等ととらえることが多いが、教師の視点としては同等の価値ではないことを確認しておく。
　→名前を付ける、お墓を作るなどは、子どもたちの思いがあれば行うが、教師が押し付けてはいけない。

〇単元の進め方〇
・個々の体験　→　全員の体験を共有、繰り返しの関わり　→　共通点がある
・全体での共通体験　→　個々の活動
この２つを児童の実態によって使い分けることが必要である。